

図書紹介

真保潤一郎・高橋保『東南アジアの価値体系3・ベトナム』現代アジア出版会、1971、339 pp.

本書は東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所における共同研究の成果刊行物である。著者真保氏は高崎経済大学教授でベトナム現代史が専門、また高橋氏はアジア経済研究所の主任調査研究員で、東南アジア史、とくにインドシナ諸国の近・現代史の専門家である。

さて本書は2篇より成る。第1篇「ベトナムにおける農村社会の変動過程と価値体系」は本書の主篇をなし、高橋氏が執筆した。フランスの植民地支配下に入る以前から植民地時代を経て、独立後の今日に至るまでの間におけるベトナム農村の変貌と農民層の価値観の変化を時代を追って考察したもので、3章に分かれる。

まず第1章「ベトナムの伝統的村落社会」では、19世紀阮朝治下のベトナム農村と農民層の価値観を考察した。著者によれば、当時のベトナム農村は強固な自治的性格を有する村落共同体で、内部においては階層分化がかなり進捗しつつあり、そこに住む農民の価値観は、日常生活では衣食住の充足、富と名誉の獲得を重視し、社会的には家族や村に対する忠誠を重んじたが、半面国家に対する忠誠はあまり重んじなかったという。次に第2章「西欧的価値体系の導入とベトナム農民の価値観」では、フランスの植民地支配と西欧的価値観の導入によるベトナム社会の変容の中における農村と農民層の価値観の変化に重点をおいて論述し、農民層はフランス支配によって強く影響を受けたものの、なお伝統的な価値体系は多くの面においてこれを保持したとする。さらに第3章「新しい農村社会と価値観の形成」では、独立後インドシナ戦争・ベトナム戦争を経過した今日までの間における南北ベトナムの農村および農民層の価値観の変化について述べ、北ベトナムでは新しい農村が形成され、社会主義的人間の形成をめざすホー・チ・ミンの指導により農民層に新しい価値

観が育成されたが、南ベトナムでは混乱がつづき、一般に価値観の分裂が見られるものの、農民層の間ではなお伝統的価値観が保持されていると説く。

なお第2篇「社会主義への道—近代化=社会主義的人間変革」は真保氏が執筆し、独立後の北ベトナムにおける社会変革とそれに伴う価値転換がどのようなものであるかを5章に分けて論述しているが、これは要するに前篇第3章の一部を専門の立場から補説詳述したものである。

以上本書の内容を簡単に紹介したが、従来のベトナム研究に欠けていた価値体系の歴史的解明を行なった点で特筆すべき労作だといえる。なお著者自身の現地調査の成果も大いにとり入れていて興味がある。ただこの国の過去における中国との関係からみて中国的価値観の影響についてもう少し詳しい説明がしてほしい。それはともあれ、本書はベトナムに関心をもつ者の必読の書であると言える。

(藤原利一郎・京都女子大)

Howard Palfrey Jones. *Indonesia: The Possible Dream*. New York: Harcoure Brace Jovanovich Inc., 1971. xx+473 pp.

インドネシアに関しての近頃の出版物の中でこれほど面白く読んだものはない。著者ジョーンズ氏は、1954年～55年の1年間 U.S. AID の Director としてジャカルタに勤務したあと1958年にアメリカの大使に任命され、1965年5月まで7年半にわたってジャカルタに在勤した。その間、非常に複雑なアメリカインドネシア関係を現地で担当し、またスカルノときわめて親しい交際を続けた。有名なキャンディ・アダムスのスカルノ伝記も著者の勧奨によって出来あがったものである。

インドネシアを離任後、ハワイ大学の East-West Center の Chancellor を1968年までつとめたが、そのあとスタンフォード大学の Hoover Institute on War, Revolution and Peace において senior re-

search fellow として国務省の文書はもとより、きわめて文献の広範な参照に基づいてまとめたのが本書である。著者は、現在 Christian Science Monitor の刊行で有名な Christian Science Publishing Society の理事会会長を勤めている。

かれはまる4年ぶりにインドネシアを訪問した。ジャカルタでの昼食会に私は同席したが、彼はもっぱら聞き手にまわっていた。おそらく彼の離任後のスハルト政権下のインドネシアを知りたかった訳であり、この旅行は本書第4部の Back from the Blink の資料にもなったであろう。その時あまりスカルノ時代のことを話したがらなかったが、彼がスカルノ後半期のインドネシアを最もよく知っている人物だけに、私にはいささか物足りなく思われた。

ところが、この物足りなさは今度の本で充たされた。それどころか彼から見た、特にスマトラ反乱、西イリアン問題、マレーシア対決のインドネシア共産党の勢力増大などの体験から見たこの期間のインドネシアの政治、外交の動きが手に取るように伺われる。さらに、スカルノ大統領の行動や性格、特に決意までの過程がきわめて興味深くヴィヴィッドに描き出されている。

もっとも、1965年9月30日のクーデターについては、彼の離任後に起こったことであるだけに本書では GESTAPU と題して一章がさがされているにすぎない。クーデターの指導者、大統領官邸の護衛将校 Untang 中佐が、このクーデターは「CIA がスポンサーをしている破壊運動である将軍会議が10月5日にクーデターを起こそうと計画していた。自分のクーデターはこの陰謀に対する予防的措置である。」と声明したことを本文で引用している (pp. 374-375)。この CIA 陰謀説に対しては、脚注で一行だけ、"This was pure fabrication. The CIA was a convenient scapegoat". とかたづけている。この点もっと詳しい説明が欲しかった。

これだけの大部の回想録をシステムティックに、しかも興味深く読めるよう書きあげたことはたいしたものである。しかも、これは回想録というよりも、自分の体験を通してのインドネシア現代史であり、インドネシア観でもある。出来るだけ主観に陥らないように多くの文献資料によって裏づけしたのはまことに見事の一言につきる。

もっとも、著者としては書きにくいことがいろいろあったのではないかと思われる。インドネシア問題を取り扱う時の難しさがこの著書の場合はその地位ゆえに特に深刻であったであろう。筆を慎んでいるとの印象がところどころ見受けられる。

インドネシア現代史、特にスカルノ政権後半期については、最も貴重な文献のひとつであろう。これだけの仕事を果たされた著者に対し、心からの敬意を表したい。

(本岡 武・東南ア研)

飯島 茂『カレン族の社会・文化変容
—タイ国における国民形成の底辺—』東
南アジア研究双書5, 創文社, 1972,
315 pp.

同一社会内の民族的多様性と相互間の共存・拮抗、同化・統合の過程は社会学的・人類学的にきわめて興味深い重要な研究であるが、ことに発展途上国においては、それが国民社会の安定性に与える影響が大きく、また直接的であるために、それだけ実際的な問題として重要な意義をもっている。

タイ国の場合、このような民族問題は今日のところ顕在化していないが、潜在的に存在するのであって、早急に解決されねばならぬ重大な課題を構成するものとして意識されている。しかしながら、従来、少数民族に関する信頼度の高い資料に基礎をおく、包括的で、集約的な報告書は皆無であるといつてよい。本書はタイ国北部山地に居住するカレン族を取り上げ、著者自身による定着的な人類学的野外調査(1964~1966)の成果に基づいて、少数民族の問題点を国民形成の立場から解明した画期的なモノグラフである。

言語体系を異にするばかりでなく、その体系的知識を欠く部族民の調査は、よほどの経験がなければ、資料収集さえ困難であろう。著者はそうした不利な状況を克服するとともに、技術的には地域的・時系の変異を功みに利用しながら、カレン族社会の歴史